

私たちは8月18～20日の期間において福岡県糸島市で農業についての国内研修を行った。沖祐輔さん、大石仙一さんの二つの農家でインタビューをさせてもらった。同じ新規就農者であってもそれぞれの農家で考え方がかなり異なり非常に興味深いインタビューとなった。

はじめに訪れたのは、沖さんが行う「おき農園」さんだ。沖さんは20代の若い新規就農者だ。とても前向きで明るく笑う姿が印象的なお兄さんである。沖さんは、大学卒業後、バックパッカーとして旅をしたあと旅で訪れたニュージーランドでの農業体験を経て農業を始めた。始めた理由は、大した理由ではなく、友達どうしで農業をやろうと声をかけあったことによるという。若くして農業をやろうと思うなんて、よっぽど強い何か意思があったのかと私は勝手に考えていたが、沖さんの動機は非常にシンプルでいわゆる“ノリ”に近いものを感じてしまった。しかし、現在の農業の後継者不足の問題には、この若者の若いからこそできる勢い、“ノリ”すらも農業を支える重要な要素になりえるのではないかと思った。なぜならば、沖さんもいうように、農業のことなど何も知らなかったからこそできる、農業をやろうと思える、と考えるからだ。沖さんには、農業を始める前に、多くの人が抱いているような農業に対するイメージ、3K（きつい、汚い、危険）などというイメージはなく、そもそも農業のことについて何も知らず、農業を始めたらどんなことが大変なのかもわからなかったそうだ。しかし、かえってこうしたモチベーションだったからこそ農業に飛び込むことができたという。たしかに、親が農業を行ったりしていて、農業の大変さを目にしているとなかなかやろうとは思わないと思う。実際にやってみると、始めるまでに、まず、農地法をもとに行わなければならない土地探しに苦労したり、天候に左右され思うように野菜が育たない難しさだったり、毎日同じものばかり収穫しなければならなかったりそれなりに大変なこともあるそうだ。そんな中でも沖さんは、やはり消費者に喜んでもらえるということが一番うれしいという。単純に太陽を浴びて自然のなかで気持ちがいいといった農業の魅力もあるが、食べてくれた人がおいしいと言ってくることが喜びだそうだ。どんな職業でも消費者が喜ぶ姿というのはかわらず働くものの喜びへと繋がっていることをお話を聞くなかで私は思った。農業に関して一通り伺ったあと、私たちは、TPPについて伺ってみた。TPPについて私は、いまいちよくわかっていないところがあって、それはきっとどこか他人事で自分自身に直接的被害がないからこそそう思うのだ。これがTPPに関して直接的に関わらない者の意見だとしたら直接関係してくる農家はどんな風に受け止めているのかとても気になった。すると、沖さんからはちょっと意外な意見が飛び出した。沖さんはTPPについて大いに賛成であるという。ただ、ほかの国に言われた通りに動くのではなく、自分たちに有利に、積極的にやればよいと。そうすれば、日本のクオリティの高い野菜を海外でも食べてもらえるし、日本の農家ももっと頑張るのではないか。例外なのは腐らない米や麦で、これらは死活問題になってしまうが、腐りやすいような野菜はそんなに問題

と考えていないそうだ。また、競争という面で、農業の問題点として、農業界の競争精神に関する意識の低さを指摘していた。沖さんの考えでは、農地法による補助金制度をなくすべきであり、できの悪い農家を保護する必要はないという。一般企業ならば、競争に負ければつぶれるのに農家ばかりが保護されるのはおかしく、農家においても競争が大事であると。私のイメージでも農業はどこかのんびりとしたところがあり、競争という言葉とは無縁に思っていた。それが農業の良さでもあるが、世界とのつながりが切り離せない現代となつては、その部分が日本品の売り上げの減少へとつながってしまうのかもしれない。また、農業界の問題が補助金制度だとすると、後継者不足に関することは問題と捉えていないのか気になり聞いてみると、またまた意外な答えが出てきて、農家を無理に増やさなくてもいいという。今は企業などが農業を取り入れているところもあるし、使わない、使えなくなった畑は自然にかえせばよいと。私は、小学校の社会の授業から農家の後継者不足の深刻さについて学んでおり、こんな答えが出てくるとは驚きだった。このお話は、実際に農家の方、いや、沖さんにお話を聞かなければわからなかったことである。沖さんは、農家を増やすならば、農業の魅力を伝え、儲かる姿を見せれば農家は増えるのではないかと考えるという。非常に簡単な答えであった。どんなきれいごとを並べたとしても、やはり生活がかかっているのだ。そういった部分では“儲かる”ことは重要なのだろう。正直な考えに清々しさを感じた。また、農地法を改善してもっと新規就農者が農業を始めやすくするというのも農家を増やすために求めることだそうだ。そんな中、競争化する農業界で、沖さんが他業者と差別化を図るために行っていることは「直接売る」ということだが、若者が普通にしていること自体で既に勝手に差別化されていくという。例えば沖さんのように Facebook など情報発信したりしても、農業界はこうした情報発信能力が遅れているため、進んでいるように見られると。

沖さんの答えはいつもシンプルで若者らしい意見をたくさん聞くことができた。そんな沖さんは、今は飲食店の売り場を増やすことを目指しており、将来はゲストハウスを展開しバックパッカーで楽しかったことのようなことをまたやりたいという。

インタビュー後は作業場を見学させてもらったり、沖さんの作った野菜が使われているレストランに連れて行ってもらった。沖さんは取材で来た初対面の私たちに、とても親切にしてくれて、農業だけではなく、糸島のあたたかさまでも教えてくれた。そんな沖さんと接する中で、沖さんが大事にしていることは「人とのつながり」なのではないかと思った。直接売りに行くこともそうだし、やはり人とコミュニケーションがあるからこそこうして前向きに取り組める沖さんがいるのではないかと。農業において大事なことは人とのつながりなのかもしれない。

沖さんはいつもまっすぐで「今を生きている」ということがすごく伝わってきた。とにかく農業を楽しくおこなっており、今日の前にある野菜と向き合う、それが沖さんの農業スタイルなのだろう。こうして純粋に農業を楽しんでできればきっと後継者不足も

改善されるのではないかと感じた。

そんな沖さんとは対照的といつてよいくらいの方が、2人目に訪れた大石さんが行く「大石ファーム」さんだ。大石さんは21年間の銀行員生活を経て農業研修後5年ほど前から独立して農業を行う新規就農者だ。大石ファームさんでは、農業体験もさせてもらった。大石さんのほかに中村さん、山口さん、三隅さん、藤川さん、小林さん、久富さん、といった6名ほどの大石さんの新規就農仲間を呼んでいただき、たくさんの意見を伺うことができた。はじめに、インタビューの前には、農業体験をさせてもらった。ゴーヤの収穫を体験させてもらったり、田んぼの中を歩いて、雑草を取ったりした。予定では種まき等もあったが、当日雨が降ってしまい、雨具を着てできる範囲で1時間くらいと非常に短い時間であったが土にふれあわせてもらった。私は小学校2年生の時に学校の畑で野菜を育て、5年生のときには学校の田んぼでお米を育てたことがあるが、やはり土の感触は気持ちがいいものだった。田んぼの雑草取りでは、イネと雑草の区別が少し難しかったが、やり始めると時間があっという間に経ってしまった。昼食には、小林さん特製の、大石さんたちが作った野菜を十分に使ったサラダやジュース、カレーライスをいただいた。農業体験をやったあとだったからか、こうして食卓に並ぶ野菜たちも農家さん一人ひとりがものすごい手間暇かけて作ったものだと考えると感謝の気持ちをいつもより持って味わって食べることができた。

インタビューでは、大石さんや仲間の方々の方が農家をやろうと思った理由からTPPについてなどを伺った。大石さんは、バブルの崩壊とともに価値観が変化し、出世競争への嫌気から脱サラし、さまざまな情報を調べる中で化学物質の脅威に気付き、そういったものがなくても行える安全な暮らしを目指すために始めたという。そのため、ただ農業をやりたかったという理由ではなく、自然に沿った暮らしを多くの人がやるようになれば、地球環境が改善されるのではないかと、地球環境改善の手段のための農業であった。だから、人々の農的暮らしのサポートをしてくために農業体験などを展開しているという。こうした考えは、久富さんや小林さんらも同じであった。久富さんは環境問題の勉強をしていて、最終的にたどり着いた改善方法が日本の農業をちゃんとする事だったそうだ。小林さんは、農業に携わるのは人間としての生活を“積極的に”楽しむためであること。また、農家が子どもとつながるように食育も行うという。化学の力によって成り立っているといつても過言ではない世界の中で、大石さんらはふと立ち止まり、初心に戻り、地球と向き合い、自然と共存していこうという強い意志や使命感から農業を始めていたのだ。大石さん、久富さん、小林さん以外では、父の影響で両親と一緒に始めた中村さん。農業はなくてはならないものだと始めた山口さん。有機農業に興味があった三隅さん。年を取り自分の食べるものは自分で作ろうと思いついた藤川さん。理由はさまざまであるが、みなさん始めた理由にはどこか自然とのつながりを強く感じ、多くの人々に自然を知ってほしいという思いが含まれているように思えた。大石ファームの方々には、ずっと先の何十年か、あるいは何百年も先かもしれない改善された

地球を見据えた農業を行っている。もしかしたら、政府よりも、日本のもっと偉い人よりも大石さんらは地球のことを考えているのかもしれない。

TPP に関しては、みなさん、前向きに捉えようとしているようであった。小林さんは、TPP により海外の食べ物に頼ってしまうことを心配していたが、それではダメで、頼るばかりではなく、日本の自給率を上げるべきだと指摘していた。一方、久富さんは、TPP はラッキーなことだと思ったそう。検査しない海外の商品が入ってくるようになるということは、中国産など今でさえ信用度が低い商品は検査がないことでよりみんな買わなくなり、国産を買うようになるのではないかと期待している。また、最終的には消費者が商品を選ぶのだし、いいものを日本が作れば海外からも求められるようになるわけであるから、TPP のルールをどう“使っていくか”が大事であるという。地球環境に関連しては、日本は現在農薬使用量世界一であり、それを知る海外の人は日本の商品を買わなくなる。そうすれば、日本の農家も農薬を見直すようになり、TPP は、無農薬化へのチャンスへと繋がるのではないかと、という意見も述べていた。沖さんのときもそうであったが、TPP は受け身になるのではなく積極的になることによって日本に効果をもたらすことができるようだ。

こうして、沖さん、大石さんを訪ね、農家を知るという私たちの研修は終了した。沖さんも大石ファームのみなさんも、私たち若者や非農業従事者に求めることは、そろってこんなことであった。それは、旬を知ること、農業を身近に感じてほしいということだ。たしかに、私たちはスーパーに行けばたいの野菜を手に入れることができ、何が旬であるか判断がつかないだろう。旬を知るだけでも今までの生活に大石さんの言う「農的暮らし」を感じるができるかもしれない。農業を身近に感じ、出所を知るだけでもそれが食の安全へとつながっていく、と沖さんはいう。食の安全が脅かされる今、消費者自身が知ろうとする姿勢は、結局は自分を守る行為となるのだろう。それに、沖さんや大石さんにいただいた食事は、誰の作った野菜かわかっていたからこそ感謝や数倍のおいしさを感じる事ができたのだ。簡単なことであるが、重要な情報だ。また、久富さんは、若者に農業をブーム化してほしいと言っていた。ブーム化して自然にふれる楽しさを伝えあってほしいと。この思いを実現するためにも、今回私たちが研修で感じたことを周りの人にも話そうと思う。そうすれば、その中に一人でも楽しそうだと思ってくれる人がいるかもしれない。その興味が農業界を支える一歩となると信じたい。

今回の研修で私たちは、さまざまな“思い”にふれた。農業は楽なことではないだろうがそれぞれ充実した顔をしていた。糸島のあたたかさを感じることができた。私たちが知れたのは農業の一部であろうが、そんな一部でさえも知ることができてよかったと思う。まずは、「旬を知る」。このことから始めたい。